慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルネサンスと自然主義
Sub Title	
Author	西脇, 順三郎(Nishiwaki, Junzaburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.1 (1948. 1) ,p.21- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ルネサンス文化
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルネサンスと自然主義

西脇順三郎

1

文藝上ルネサンスといふ意味が最大に意味されてゐるのは結局所謂ヒューマニズム Humanism である。

ヒューマニズムは中世紀の中央の思想に對立した一つの思想の傾向を示してゐる。

それは羅馬カトリック教會が發展させた中世紀文化に對立した新しい文化系統である。卽ちギリシア及羅馬の文學、學問乃至ギリシア及羅馬文化に對する憧憬である。

キリスト教は勿論中世紀に相當な程度にギリシア羅馬の文學や學問を取入れてその羅馬カトリック教的文化を作つてゐた。早くから讀まれてゐたボエチュウス (Boethius) を通じて間接にギリシア哲學に觸れた。またカトリック神學の中心であるアクキーナス及びスコラ哲學者はアリストテレスを崇拜した。

中世の大學や學寮では古典文學が讀まれてゐたがそれは artes liberales の中に織込まれてゐた。この自由學術も結局は神學の補助學問である。

また早い時から中世の諸侯の朝廷で文學が發達した。また市民の間には通俗文學が發達した。ゲルマン民族の間でも早くから、スコップとかスカルドと稱ぶ遊歴の樂人詩人が發生してゐた。またフランスにあつた詩人樂人Jongleursなどは學校出の教養ある人達が多いのであつた。これ等の人達が教會外の文學を作つたのであつた。是等の樂人詩人は古典の書から文學を作りつゝあつた。早い頃のスコップの作品にも古典の影響をみることが出來るといふ學說さへ出てゐる。例へば、アングロ・サクソン文學中、英雄物語「ベーオウルフ」にはウェルギリュウスのエーネド物語の影響があり、また或るアングロ・サクソンの斷片的詩「女房の歎き」などにはオヴィディウスの「ヘロイデス」の影響があつたのではないかと考へる學者も出た。

要するに中世紀の通俗文學の大部分は古典文學の影響から發生してゐるといつても過言ではないと思はれる。

中世の戀愛物語さへその源泉はオヴィディウスであつたといふ人もゐる。

ルネサンスのヒューマニズムは突然起つた現象でなく、比較的徐々に來てゐることがわかる。

ルネサンスの思想として古典文學教養を唱へたのは恐く一般歴史家のいふ如く、ペトラルカであらう。殆ど同じ意味でボッカッチョもさうであらう。

十三世紀に、フランスで「薔薇物語」の後篇を書いた學者Jean de Meungなどは或る見地からは立派なヒューマニストであつたといはなければならない。こゝに中世に於ける初めての近代的な自然主義がある。

2

中世紀の文化はキリスト教を中心として、一般に統一され、また一方からみれば固定した狀態にあつた。さうした一般中世紀世界觀、人間觀、自然觀に對して、ヒューマニズムの運動が現れて來た。

中世紀人がキリスト教的中世紀以前のギリシアや羅馬の文化を價値あるものとして憧憬し始めた時に近世が始まる

のであつた。

換言すれば古代にもどることによつて近世が始まるといふ一種の皮肉な現象をみたのである。

所謂「古代の發見」によつて中世紀的思想や藝術が改新されたのであるが、古代の文化は一般中世紀思想に對立して價値あるものと認めるその心理が大切である。

さうした新しい見方を發見したのは古代の文學や學問から初めて學んだといふよりも、もう少し深いものがある。人間は恐らく不斷に個人の自由開放を求めてゐる。それは人間は如何によく生活しようとしてゐることである。人間はいつも發展しようとしてゐる。

さうした心境が古代ギリシアや羅馬の文學、學問、藝術に價値あるものと考へせしめた心理的原因であらう。

ヒューマニズムによつてルネサンスの運動が背景づけられた。個人の自由といふことを中心として、ルネサンス思想は、その内容からみると、近世の凡ゆる思想感情が自由に並行し共存して、一見非常な統一のない狀態を示してゐる。

ルネサンスの理知的運動は凡ゆる方向に進む自由をもつてゐた。隨つて互に相反する思想が共存する場合も出來た。一般にルネサンス思想といふものゝ内容は多種多樣であつて決して、統一することは出來ず、むしろ矛盾した二つの思想から出來てゐる。ただ個人の自由といふことで統一が出來る。

ルネサンス人は先づ各々新しい見地から中世紀の（その時は、その當時の）思想を批判し、或る人は全然それを排斥し、或る人はこれを調節中和しようとした。

さうした意味でルソーはルネサンス運動の最後に最も大なる影響を與へたものであると考へられる。彼は歷史的にはルネサンス人ではないが、ルネサンスの精神を最大に發展させたものである。

文藝が崇拜されたことはヒューマニズムの一の外面的な現れである。文藝で不朽の名を殘すことは人生の最大な名

譽と考へられるやうになつた。

文藝人は人間の最もすぐれた人であり、常に知識を求めた。「完全なる紳士」は文藝人である。文藝人は新しい貴族と考へられてゐたと言ふ學者もゐる。さうした意味で教養あるといふことは文藝に從事し、また文藝を好み、文藝を解することであつた。

ルネサンス人の代表的なタイプは凡ゆることを知り、凡ゆることに偏見をもたず、個人の自由を求める世界的な人間である。信仰の自由、思想の自由を唱へたことも、あまりに固定的な制裁の中世紀制度を批判するのであつた。

中世紀の批評家として有名なものはエラズムスであるが、トマス・モアも同樣な役割をその「ユートウピア」でなしてゐる。

ルネサンス時代にはプラトニズムが盛であつたのも、一つには中世紀のスコラ學派のアリストテレスに對立したのである。

「自ら考へよ」といふことは十九世紀中でもスチュアト・ミルが特に言つたことであるが、これも個人主義の一つの當然の考へ方である。

文學の方面からみると、ヒューマニズムはヨーロッパ文學に新しい言語上の表現を教へた。

また文學の構成の上でも、ルネサンスは二つの相反する方向を教へた。その一つは所謂古典主義といつて、羅馬詩人ホラーティウスやアリストテレス（その「詩術」）に從つて行くものと、ロマン主義的な傾向を示すものとがあつた。

3

ルネサンスの運動は今日でも尙ほ繼續してゐると考へることは一つのアナクロニズムであるが、併し人間の理知の

爭鬪からみれば、今日でもそれが實際に多く活動し得るものであらう。

さうした觀點から、今、自然論に就いて考へてみよう。私の考へでは、ルネサンス運動の根本的人間の動きは個人の自由開放發展である。併しその立場は何か一つの哲學的乃至宗教的乃至詩的立場に立つものであるが、それは、どんな理念であらうか。私の考へでは、それは近世の新しいエピキューリアニズムである自然といふ觀念である。

自然といふ觀念は近世ヨーロッパ文化思想に重大な意味をもつて來た。またその意味も多種多樣に發展分裂してゐる。

道德論からいふ場合、道德上の自然主義といふのは自然は善であるといふことから出發しなければならない。少くとも自然は善でもなく惡でもなく人間自然の現象であるから、道德上の責任は寬大に取扱ふべきであるとする。

自然論はもう中世紀の中葉から古典文學の影響の一つとして中世紀文學に現れてゐる。その著しい例としては「薔薇物語」の後篇を書いたジャン・ド・マンである。

この場合は、主として戀愛論の中に自然論を入れて、戀愛は善でも惡でもない、自然の現象にすぎない。封建制度に發達した戀愛の大切なことを說いた說に相對立して、この自然論が出來たのである。さうした自然論は中世一般のセンチメンタルな乃至ロマンティクな戀愛論に反對したのである。

ダンテの神曲ではキリスト教の性操の根本は愛であると說き、一般戀愛論を宗教化したのであつた。

ルネサンスになつてはプラトニズムが戀愛論の中樞となつて來た。この傾向はすでに中世紀の末葉のペトラルカニズムに現れてゐた。

自然論は政治法理論の中に於ては、王の神權說に對立して、自然法を說くのであつた。

詩論の中に自然といふ觀念がはいつて來たのは明かな論としてはボアローの「詩法」(一六七四)である。自然の表現を好むのであつた。自然は眞理である。美の本質は眞理である。これは所謂十七世紀に發達した佛蘭西の古典主義

（クラスィスィズム）の表現理論であつた。

この詩論に反對して超自然を主張したのは英國の十九世紀の終り頃コウルリッヂといふ詩人、詩論家である。その後ボオドレルに至つて文學は超自然主義であるといふことが普通の觀念とさへなつた。超自然を主張するのは今日の術語としては直ちにロマン主義といはれるのである。この觀念からのみ見れば、今日のスュルレアリズムはロマン主義の極端になつたものである。

今日の自然主義といふのはロマン主義で對立したもので物質主義である。隨つて現實主義である。

ルソーの自然主義は先年長い間バビットによつて攻擊されることになつた。それはルソーの自然主義を道德上の理論として攻擊するのである。

歷史的にいふと自然主義は結局、文學の理論とすると、三部門に分かれ、その意味は各々異なるものとされる。

（一）古典主義では自然といふことは理性であり合理性である。さうした自然なる知性は英國ではコモン・センス、佛蘭西の古典主義者はボン・サンスとよぶところである。これはロマン主義者の主張する想像力イマジネーションと反對な知力と感性である。

古典主義とロマン主義は自然といふ意味が異なるところは、こゝにある。

（二）ロマン主義者が自然を重んずるといふことは、その代表的なルソーで周知のことである。啓蒙的文明に反對して、原始的な社會、或は原始的な人間性、或は自然の風物を重んずるのである。

十八世紀の英文學ではその意味で農民文學が特に現はれて來た。

バーンズはスコットランドの貧しい農民の悲劇的方面を描き、ワーヅワスは貧しい農民の悲劇的なものを取扱つてゐる。

十九世紀ではメレデスは富める農民（地主階級）の喜劇を描いた。

ハーディは主として貧しい農民の悲劇を描いたが、ハーディの自然觀はルソーやワーヅワスと異なり自然は人間に利するといふことを考へず、寧ろ自然は人間に對して冷膽に盲目的に別個に働くといふミルの說をもつてゐた。併し貧しい農民の姿は人間の最大に力强いものとしてゐる。

ハーディの自然觀はメレデスの如く共に自然科學的である。

(三)自然主義といふ文學は、今日の文學の大半の傾向であるが、初めテーンやゾーラの如き態度からである。これは比較的自然科學的ともいへるし、また心理學的であるともいへる。それは人間の行爲や意圖は物質的または肉體的に決する原因結果を明かにする文學である。また社會環境の影響をも取入れるのである。

ルネサンス運動は今日からみる時は、結局自然主義に結果として發展したものとなり、政治的にみれば個人主義となり民主主義になつたものと思はれる。

近世ロマン主義の源泉はルネサンスにあるとして、ロマン主義反對の人達はルネサンスを攻擊するのであるが、併し近代の自然主義(その內容は前述の如く種々變遷はしてゐるが)發展の源はルネサンスの個人の自由を認めたことであると言ふことが出來る。